

# デリダの理論とメタ・ビデオ

## 『私自身に話すこと』と他の関連するビデオについてのノート

飯村隆彦

メディアアート表現学科

The Theory of Derrida and Meta Video

—A Note on “Talking of Myself” and Other Related Videos

IMURA Takahiko

Department of Media Arts

(Received November 12, 2001 ; Accepted January 18, 2002)

私が最初にビデオで「私自身」を扱った作品は1972年から74年にかけて制作した『セルフ・アイデンティティ』であった。この作品は短い5つの作品のシリーズで出来ているが、基本的なアイデアは、私がカメラに向かって自分の名前を言い、それが肯定と否定、「私」、「あなた」、「彼」など主語を示す人称の変化によって、どのようにアイデンティティが形成されるかという問題を扱っている。

作品は英語で語られているが、たとえば最初の作品はわずか1分の作品で、“I am Takahiko Iimura”と“I am not Takahiko Iimura”の肯定・否定がくり返される。最初に画面と同時に（同期録音）で、次にオフ・スクリーン（非同期録音）で発音され、最後に、同時に同期録音とオフ・スクリーンとで発音される。

この間、画面は最初から最後まで、本人の顔が出ているのみで、同期録音の場合には口が動き、オフ・スクリーンの場合は口が動かないというわずかな、しかし、重要な変化が見られる。








この作品は、画面と音声同期するアイデンティティと、画面が同期しない、音声のみのアイデンティティの二つを別々に想定した。両者はそのアイデンティティを別々に主張してからそれぞれ、否定する。最後に、両者ともに声による同時否定によって、（少なくとも理論的には）導き出される肯定、「飯村隆彦でなくはない＝飯村隆彦である」をビデオの外に、すなわち「私」を含めた観客の知覚の中に現象するものである。（Chart 1: Self Identity 1を参照）。

『セルフ・アイデンティティ』は、通常のビデオで、習慣づけられている視覚と音声の同一化に対して、“見

ること/聞くこと”の分化によって実現された肯定と否定の間の弁証法の方法によるひとつの総合を提示し、作品とは観客（ビューアー）の知覚によって現実化することを試みたものである。

このビデオを作ってから、私はたまたまロラン・バルトの論文（英訳）を読んでいた、次のような一文を発見して、私がビデオで行ったことを、バルトがすでに言語について発言しているのを知って、大いに力づけられた。

Chart 1: Self identity 1

picture (mouse)	recording	voice	min. sec.
	synch.	I am Takahiko Iimura	10
	off	I am Takahiko Iimura	15
	synch.	I am Takahiko Iimura	25
	off	I am not Takahiko Iimura	30
	synch.	I am not Takahiko Iimura	40
	off	I am Takahiko Iimura	45
	synch. off	I am not Takahiko Iimura I am not Takahiko Iimura	1:05

synch. = voice synchronized with the picture  
off = off-screen voice de-synchronize with the picture

The *I* of the one who writes *I* is not the same as the *I* which is read by *thou*.

(「私」と書く者である「私」は「あなた」によって読まれる「私」と同一ではない。)

—“To Write: An Intransitive Verb?” (「書くこと：自動詞か」), Roland Barthes, *The Structuralist Controversy* (構造主義論争), Eugenio Donato & Richard Macksey ed., The John Hopkins University Press, 1972, p. 141. イタリックは原著者、筆者訳。

私がビデオで行ったことは、バルトの場合と似て、一人称のオーディオとビデオのシグニファイア(意味するもの)の間の問題のある関係を発展させることで、ひとつの違いを示すことである。音声と画像とが同期する「私」と音声のみの「私」が必ずしも同一ではなく、さらに二番目の場合、画像の中の話者の「私」は、バルトの読み手に当たるその聞き手(観客)の「私」とが非同一化するということを提示することであった。したがって、われわれは、バルトにならって、

“The *I* of the one who says *I* is not the same as the *I* which is heard by *thou*”

(「私」と発音する者である「私」はあなたによって聞かれる「私」と同一ではない。)

ということが出来る。このような「私」と「あなた」の関係と、さらに「彼」を含めた三角関係におけるアイデンティティの問題についても、『セルフ・アイデンティティ』は扱っている。ひとつの状況では、画像と音が同期し、別の状況では、音声のみで、画像と同期しない場合とがある。カメラに向かって画像と同期する声は観客に対して語っているように見え、音声のみの発声は、観客と画像の中の人物に対して語る。画像の外部の声のアイデンティティは、通常、記録映画のナレータのアイデンティティとして問題となるところだ。私のビデオでは、同一の音質をもつ複数の「私」の非同一化という、文字の場合の「私」の抽象性とは異なる具体性をもっている。したがってビデオの「私」は画像に属する同期音とそのアイデンティティがあいまいである「私」によって発声された非同期音との間の明らかな区別が成立する。非同期音は画像が撮影された後に、同じトラックか、ステレオの場合には、別のトラックに録音される。

このようなビデオにおける「私」の問題を考えているときに、私はジャック・デリダの「声と現象」(英訳)を読んで次のような文を見出した。それは私が『セルフ・アイデンティティ』で問題とした「話す」と「聞く」こ

とにかかわるものであった。

“When I speak, it belongs to the phenomenological essence of this operation that *I hear myself at the same time that I speak.*”

(「私が話すとき、それはこの作用の現象学的な本質に属する。すなわち、私は話すと同時に私自身を聞く」。)

“The Speech and Phenomena, and Other Essays on Husserl’s Theory of Signs”, Jacques Derrida, translated by David B. Allison, Northwestern University Press, Evanston, Ill., 1973, P. 77. 下線(原著はイタリック)は原著者、筆者訳。  
尚、邦訳は「声と現象」高橋允昭訳、理想社、昭和45年。

この2節目の文(下線)にデリダが主張するように、「現象学的な本質」があるとすれば、私はそれをリアライズすること、すなわち現実、その文を発声し、聞くこと、それをビデオに記録することによって、それが文によって読まれる場合とは現象学的な相違があるかどうか。

デリダのいわゆる言語中心主義に対する批判は、声をもつ、西洋哲学における特権に対して検討するものである。しかし私にとっての主な関心は、デリダとは異なり、さきに引用した文をリアライズすることで明らかになる問題を示すことにあった。

デリダは同じ本の2-3頁あとで、次のようにも書いている。

「誰かに向かって話しかけることは、たしかに<自分が話すのを聞くこと>、自分によって聞かれることであるが、しかしそれは同時にまた、もしその人が他人に聞かれるとすれば、他人がその同じく自分が話すのを聞くこと>を私が生み出したときのまさにその形のままで、自己のうちで直接的に反復するようにさせることでもある」。

(高橋允昭訳、前掲書、傍点原著はイタリック、151頁)

これはデリダのいう「私が話すと同時に私自身を聞く」(I hear myself at the same time that I speak)を分析的により詳しく言い表わしたものである。1978年に、この文を基礎に、私はもうひとつのビデオ作品でそのタイトル『Talking to Myself: Phenomenological Operation』(『私自身に話すこと：現象学的作用』)という作品を作った。これは『セルフ・アイデンティティ』と同様、6つの短い作品のシリーズから成り、それぞれはわずか2、3分で、その全ては、引用した文を異なった方法で実現している。

Chart 2: Talking to Myself 1

picture (mouse)	recording	voice	min. sec.
	synch.	I hear myself at the same time that I speak	10
	off	I hear myself at the same time that I speak	20
	synch.	I hear myself at the same time that I speak	30
	off	I hear myself at the same time that I speak	40
	synch. off	I hear myself at the same time that I speak	50
	off synch.	I hear myself at the same time that I speak	1.00
	synch. silent	I hear myself (at the same time that I speak)	1.10
	off silent	I hear myself (at the same time that I speak)	1.20
	silent	(I hear myself at the same time that I speak)	1.30
	silent	(I hear myself at the same time that I speak)	1:40
	synch. + off	I hear myself at the same time that I speak I hear myself at the same time that I speak	2.00

synch. = voice synchronized with the picture  
off = off-screen voice de-synchronized with the picture  
silent = the mouth is opened, but no voice is heard

最初の作品『私自身に話すこと：現象学的作用1』(Chart 2: Talking to Myself 1 参照)は同期音(synch.)と非同期音(off)の録音による発声のくり返しがある。画像は、最後まで本人が正面を向きカメラに対して話すのは前作と同じである。しかし、この場合、声は、前半が同期、後半が非同期で録音された。すなわち、前半の「I hear myself」が同期音、後半の「at the same time that I speak」が非同期音である。双方の発言とも声は同じ本人だから、口の動きによって同期されているかどうかが決まる。さらにその直後、前半だけ語られ、後半はサイレント(およびその逆の場合もつづけて行なわれる。)であるので、この場合は、より容易に、前半と後半の違いが分かる。

このような実験によって分かることは、引用した文において「私が話すこと」と「私が聞くこと」の間には、自明とされるアイデンティティはない。ビデオではその間に分裂があって、「私が話すこと」の「私」と「私が聞くこと」の「私」は必ずしも同一ではない。何故なら、同期音で話す画像の中の「私」は、非同期音の画像の外の「私」が話すことを聞くことは不可能(その逆も、画像外の「私」が語ることを画像内の「私」は聞くことができない)だからである。両者を同時に見る/聞くのは、観客のみである。

さらにサイレントの部分において、観客が「話す」と

すれば、[画像の中の]無声の動く口は、観客自身が沈黙のまま同様に発声することを勧誘するため、観客は画像とは別に黙って「話す」(「内声」を意味する)ことになる。

このような方法で観客はデリダが描く状況を現実化する。それは、「他人がその同じく自分が話すことを聞くこと」を、私がそれを生み出したときのまさにその形のままで、自己のうちで直接的に反復するようにさせることでもある」。

(前掲書、151頁)

内声(サイレント・ボイス)とは、話者によって、内部に聞こえる声であり、発声にならない声、沈黙の声であり、自己に向かって話された声である。

私は『私自身に話すこと：現象学的作用』において表現された声を方法的に検討してきた。話す「私」と聞く「私」の分裂は、ビデオによる現実であり、画像と音を伴う複製手段であるビデオの再生において、デリダによって描かれた状況は自明であるとはいえない。

『私自身に話すこと：現象学的作用2』において、私はデリダの文を反転し、それをデリダのオリジナルの文に接続することによってひとつの循環するエンドレスの構文を作った。すなわち、

I hear myself at the same time that I speak to myself at the same time that I hear.....

(私は私が私自身に話すことを同時に私自身聞くことは同時に私が聞くことを私は私自身に話す...)

これは正確にはふたつの文から出来ている。

(1) I hear myself at the same time that I speak

(私は私が話すことを同時に私自身聞く)

(2) I speak to myself at the same time that I hear

(私は私が聞くことを同時に私自身に話す)

このふたつの文を結合したもので、(1)では主文は「私自身聞く」ことにあり、それを他人が「聞く」ことを暗示することを許すものとして書かれている。(2)の主文は「私自身に(向かって)話す」ことであって、より反省的なもので、自己完結する行為である。(1)はダイアローグとモノローグを含むが、(2)はモノローグのみを対象とする。したがって、デリダの文は、作用の半面であり、もうひとつの半面である(2)の文を加えることによってひとつの循環となって、相互作用を作り出す。この場合、「at the same time that」が「私が聞くこと」を「私が話す」ことに結びつける言葉であるとともに、単文の前後関係を循環構造に転換する。「話すことを同時に聞く」といったとき、すでに発声としては「話す」と「聞く」の間にひとつのインターバルがある

が、それは声がふたつの語を同時に発することが不可能だからである。

この操作は次のような結果(作品)を作り出す。ひとつの循環する文が、同期音と非同期音とで交互に15秒間隔で発声され、しかもこの非同期音の発声は、ひとつの遅延として見え、かつ聞こえ、その差が急速にひろがっていく。同じ文のくり返しとして聞こえながら、画面との関係で分離を起こし、そのずれが奇妙な録音「間違い」として聞こえるとしても、最後には、意図的なずれとして理解されるものである。

この作品は「聞くこと」と「話すこと」の相互作用が循環文において完結するものでありながら、画面との関係では、(すでに前作で見たように)、非同期音声と同期音声の間の間隔として知覚される。

『私自身に話すこと』(Chart 3: Talking to Myself 3 参照)は、しばしば、インスタレーションとして行った。この作品は「I」と「You」のかけ合いとして原文のふたつの主語を入れ替える前半と、私の作った反転文を同じように入れ替える後半の二部からできている。したがっ

て、その間の主語、動詞のみの関係を書くと、

前半は

I hear / I speak  
You hear / I speak  
I hear / You speak  
You hear / You speak



















後半は

I speak / I hear  
You speak / I hear  
I speak / You hear  
You speak / You hear

の計八通りのバージョンをくり返す。ビデオ・インスタレーションでは、二台のVTRと二台のモニターが向き合い、それぞれステレオで再生される声は四台のスピーカーから囲む形で聞こえる(同期音と非同期音は別々のスピーカーから聞こえる)。

このように I / You、hear / speak、が空間的に同期/

Chart 3: Talking to Myself 3

picture (mouse)	recording	voice	min. sec.	picture (mouse)	recording	voice	min. sec.
	synch.	I hear myself at the same time that I speak	10		synch.	I speak to myself at the same time that I hear	1.40
	off	You hear yourself at the same time that you speak	20		off	You speak to yourself at the same time that you hear	1.50
	synch.	I hear myself at the same time that I speak	30		synch.	I speak to myself at the same time that I hear	2.00
	off	You hear (yourself) at the same time that I speak	40		off	You speak to yourself at the same time that I hear	2.10
	synch.	I hear (myself) at the same time that you speak	50		synch.	I speak to myself at the same time that you hear	2.20
	off	I hear (myself) at the same time that you speak	1.00		off	I speak to myself at the same time that you hear	2.30
	synch.	You hear (yourself) at the same time that I speak	1.10		synch.	You speak to yourself at the same time that I hear	2.40
	off	I hear myself at the same time that I speak	1.20		off	I speak to myself at the same time that I hear	2.50
	synch.	You hear yourself at the same time that you speak	1.30		synch.	You speak to yourself at the same time that you hear	3.00

synch. = voice synchronized with the picture  
off = off-screen voice de-synchronize with the picture

非同期の音として配置されることによって、一本のテープで聞く場合よりも、それぞれ別々の「人格」があるかのように聞こえる。四つのスピーカーから出る音は若干オーバーラップしながらも、個々に認知できるように時間的な配列がある（Floor Plan: Video Installation “Talking to Myself” 参照）。

このインスタレーションによって、私は初めてコレスポンドするシステムを設置することができた。あらかじめくり返し録音/録画したビデオテープには、二つのモニターと、四つのスピーカーから再生され、それがひとつのエンヴェイラメントとして成立した。私が自ら「話す」「聞く」ことは、画像と音声別々に生み出される方法で、何度も再生された。くり返されるビデオの元の長さは3分である。

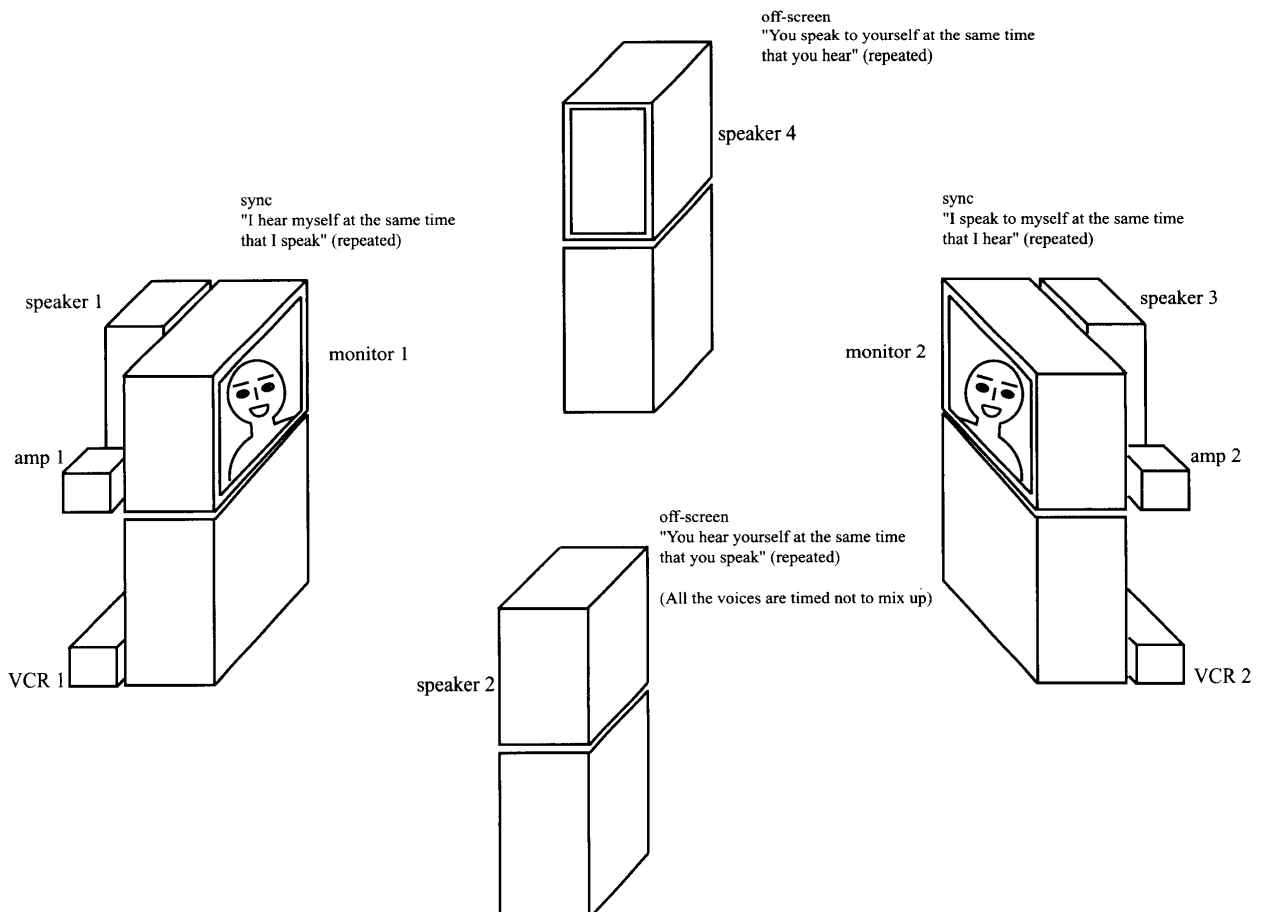
私は自分がビデオによって作り出された環境のその中心に座っている時の奇妙な経験を忘れることはできない。モニターの像もスピーカーの声も、私のものでありながら「私の」現象ではなく、「私自身」でもない。「私」がまさに「他者」として私に語るとき、そこにいると考え

られる私は、「私」の多様な断面に分解する。その結果、ビデオとオーディオの面で「私」のディコンストラクション（脱構築）が起こっている。そのすべての断面を同時に理解することはほとんど不可能で、そのためには少なくとも数回は見なければならないだろう。

このインスタレーションはニューヨークやヨーロッパの美術館で何度も行ったが、ひとつの会場でじっと動かず座り込んでいるわずかな若者がいたことが強く印象に残っている。ニューヨークのPS1で行ったときには、たくさんの観客がオープニングに来て、観客との間で議論も行った。私が他の観客と同じように座って見ていると、モニターの像と私と交互に見て、「あなたは誰か」と聞くから、「私はあなたと同じように観客だ」と答えた。この場合、私が見ている時、私は作者でありながら、観客の一部であることは間違いないが、画像のなかの「私」とは異なっている。またなかには、「これを見ていると気が狂う」という人もいた。

『私自身に話すこと』制作のあと、私はビデオで『ダブル・アイデンティティ』（1979年）という作品を作っ

Floor plan: Video Installation “Talking to Myself”



た。これは『セルフ・アイデンティティ』(1972~74年)を発展させたもので、副題を「二重否定が肯定に転じることについて」というように、すべての発言が最後には二重否定を作り出した。(Chart 4: Double Identity 1, 2 参照)

『ダブル・アイデンティティ』はそれぞれ1分半の短い五つの作品(Piece)のシリーズからできており、すべての作品を通して現実のモニターの中にもう一つのモニターの映像が現れる。その結果、現実のモニターの中の「私」とその画像のモニターの中の分身とを見るときに複層した構造がある。全ての声は実際に録音された同期した録音である。画像はすでに記録されたものが再生され、その画像を見るモニター上の人物もすでに事前に録画されたものである。したがって事前録画のプロセス

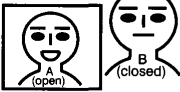
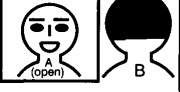








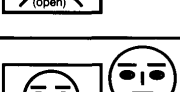

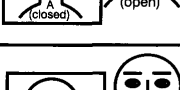

でもふたつのステップを経て、最初と二代目の違いがある。同一人物が双方のモニターで話し、二人の人物はアイデンティティの肯定と否定の主張のやりとりがある。最後に両者とも前もって主張した自己のアイデンティティを同時に否定する。

この二重否定が『セルフ・アイデンティティ 1』にあったものと同じである。

それを今度はそのシリーズを通して変化し、画面との関係を変えながら行っている。文の基本的なパターンは次のようなものである。(Chart 5: Double Identity 1, 2, 3, 4, 5 参照)

Piece 1, 2 は、最初はふたつの「私」(A & B)の間でアイデンティティをとともに主張し、次に一方が主張して、他方が否定し、最後にもともに否定する。Piece 3, 4, 5 で

Chart 4: Double Identity 1 &amp; 2

picture (mouse)	voice	min. sec.	picture (mouse)	voice	min. sec.
	A: I am Takahiko limura	10		A: I am Takahiko limura	10
	B: I am Takahiko limura	20		B: I am Takahiko limura	20
	A: I am Takahiko limura	30		A: I am Takahiko limura	30
	B: I am not Takahiko limura	40		B: I am not Takahiko limura	40
	A: I am not Takahiko limura	50		A: I am not Takahiko limura	50
	B: I am Takahiko limura	1.00		B: I am Takahiko limura	1.00
	A: I am not Takahiko limura B: I am not Takahiko limura	1.10		A: I am not Takahiko limura B: I am not Takahiko limura	1.10

A = person inside the monitor

B = person outside the monitor

All the recordings are synchronized with the picture

Chart 5: Double Identity 1, 2, 3, 4, 5

1, 2			3, 4, 5		
piece	picture	voice	piece	picture	voice
1	A	I am Takahiko Iimura	1	A	I am Takahiko Iimura
2	B	I am Takahiko Iimura	2	B	You are Takahiko Iimura
3	A	I am Takahiko Iimura	3	A	You are Takahiko Iimura
4	B	I am not Takahiko Iimura	4	B	I am Takahiko Iimura
5	A	I am not Takahiko Iimura	5	A	You are not Takahiko Iimura
6	B	I am Takahiko Iimura	6	B	You are not Takahiko Iimura
7	A+B	I am not Takahiko Iimura	7	A+B	I am Takahiko Iimura

A=person inside the monitor

B=person outside the monitor (Except piece 5)

は「私」と「あなた」のやりとりで、最初は一方が主張して他方が同意し、次にともに相手を否定して、最後は同時に自己を否定する。

それぞれの作品で、最後の自己否定は観客の知覚における二重否定による肯定を暗示する。すなわちアイデンティティはメディアの外側にある。

画像における二重構造についてはすでに書いたが、その構成はそれぞれ異なり、最初はA、Bが並列し（Piece 1, 3）、次に相互に切りかえし（Piece 2, 4）、最後に（Piece 5）両者ともに現実のモニターの中に並列して現れる。

最後の二重否定は、厳密に言えば、ふたつの文が発声されるもので、否定だけではなく、すべての単語が二回ずつくり返される。ふたつの文の間合いはそれぞれ若干異なるが、文として表記すれば次のようになる。

I, I, am, am, not, not, Takahiko, Takahiko, Iimura, Iimura

もちろん、これは、正確には二重否定を表現したものではない。しかし、否定も含め、全ての単語がくり返され、この一連の言葉が二重否定を含むことから、ひとつの肯定文として論理的には解釈することが出来るだろう。ここでは論理的に可能なことはひとつの実験として成立しようと考え、さらにその実現の不明さを含め、観客にひとつの問題：観客における肯定の知覚による作品の実現を提起するものだ。

私は、私自身をその主体として用いてきたが、これらのビデオにおける「私」は私に関するものではなく、ひとつの抽象としての「私」についてである。言い換えれば、声もイメージも、名前も私のもので、それを否定しないが、ビデオにおいて、代表される「私」は飯村隆彦のパーソナリティとは関係ない。むしろ、ビデオの「私」は誰でもなりうる主語である。

これらのビデオがアメリカで制作されたことは意味のあることで、何故なら、アメリカが私によって外国であることが、私のアイデンティティについて考えさせた。私が、日本にずっといたらおそらくこのようなビデオとしてアイデンティティを問題にすることはなかったと思う。日本では、アイデンティティは「与えられた」ものであり、アメリカにおけるように自ら「選んだ」ものではない。その意味で、私は自分のアイデンティティをビデオで選び、創作しなければならなかった。

上記に述べた作品に加えて、私は自分—飯村隆彦—を主題としないアイデンティティの作品を制作した。観客の参加することを考えたビデオ・インスタレーションとして行われたのがニューヨークのホイットニー美術館での『I=YOU=HE/SHE』（「私=あなた=彼/彼女」（1979年）である。美術館の一室に3台のカメラと3台のモニターをそれぞれ異なった地点に設置し、部屋の中央に一つの回転椅子がある。それぞれのカメラ/モニターは椅子の近くの3つのヘッドフォンのひとつにつながり、それぞれのカメラは、椅子に座った人物?正面、側面、背面?のひとつの姿のみが映る。観客が一人ずつ座って、ヘッドフォンをかけ、声を聞く。観客が選ぶカメラによって彼/彼女は、正面は「私は.....」、側面は「あなたは.....」、背面は「彼/彼女は.....」を聞く。これらの言葉は、一定の間隔でくり返され、観客はこの文を作成することを求められる。この組み合わせは、回転椅子を回すことで変化し、3台のモニター上のイメージは巡回する。イメージと発声の当初の関係は変わり、したがって、正面、側面、背面のどの視点も、テーブルから発声される三つの代名詞（私、あなた、彼/彼女）とも偶然的に、同期することがある。このように同じ人物が、三つの視点のどれかが、異なった代名詞（私、あなた、彼/彼女）のひとつを聞くことがある。このような方法で、映像と

言葉との常に変化する関係がこのビデオのタイトルである「私=あなた=彼/彼女」で、表されるような等式を生み出す。美術館に来た多くの観客が、作品に参加し、中には長い時間にわたって座り、異なった映像に向かって、自分で文章を作成する人たちもいた。このインスタレーションは、パブリックな作品として設定されたが、その参加者には、それぞれ異なった経験を生み出すことを意図したものである。

会期中の一晚、私はこのインスタレーションを使って、私自身のパブリックなパフォーマンスを行った。回転椅子に座って、ヘッドフォンをかけながら、私が即興で文を発声し、スピーカーを通して声を拡大しながら、観客にはヘッドフォンから聞こえる声と私の応える声の双方が聞こえた。例えば、「私は座っています」、「あなたは聞いています」、「彼は見えています」というように簡単な文を発声した。回転椅子の向きを変えることは、他の発声を強いられ、その間代名詞は10秒おきに聞こえてくるから、目の回るような機転の連続であった。同じパフォーマンスで、第二部では、直ちにVTRによって、記録された第一部がモニターのひとつに再生され、私は一部と二部の両方に対して話した。一部の「過去」と二部の「現在」が同時に見られ、かつ、聞かれた。ここでは代名詞と視点ばかりではなく「過去」と「現在」が混在した。

私は第一部で「私は見ている」と発声したものを第二部では「あなたが聞いている」と発声した。したがって、第一部で「私」であったものが、第二部では「あなた」になった。このパフォーマンスは、全く即興的に行って、終わりには殆ど、私自身コントロールを失って、『私自身に話すこと』で、観客が感じたように「私はこの作品を見ると（行っていると）、気が狂った。」

観客はモニター上に三つの映像一ひとつは第一部のビデオと他の二つはカメラからのライブ映像一を見、聞い

た。さらに、ふたつのスピーカーからの別々の声一ひとつはビデオから、他はライブのマイクから一を聞いた。全ての活動の中央でパフォーマンスを行う「私」がいた。これら全ては同時に行われていたから、異なった声と映像とを識別することは難しかったが、それでも、観客はパフォーマンスを楽しみ、それが挑戦的なものであることを見出した。

私のビデオの実験に対してホイットニー美術館のキュレーター、ジョン・ハンハートは、ポスト・モダンのコンテクストのなかで次のような評価を行っている。

「飯村の芸術的な発見は、言語を一西洋の言語を通して一複雑な知覚にかかわるイデオグラムとして捉え直す可能性を示した。その成果は、話し手の経験を通して言葉の連続的な脱構築を試みたことである。飯村は、したがってビデオ映像のイデオグラムによるデリダ的な脱構築の可能性をその芸術的テクストにおいて組織化する。明らかにポスト・モダンの転回において、芸術家の自己と観客の間に生じる弁証的關係を扱う理論的方法の作品化によって、言語学の領域で発見された弁証法に位置づけを行う。そこでは“I”と“YOU”のような簡単な言葉が話され、その複雑きわまりない面と深遠な面とを発見している。」

(John Hanhardt, *On the Video Work of Taka Iimura*, Whitney Museum, New York, 1979. 筆者訳)

後記 この原稿は飯村隆彦著「映像実験のために」青土社、1986年、pp. 222-242、に収録された同じタイトルの論文を、今回、DVD『Seeing / Hearing / Speaking』(2002年)(協力: Alfred University/ニューヨーク、東京工芸大学/東京、ユーフォニック社/東京、助成: ニューヨーク州アート・カウンシル)の制作のために、大幅に改訂したものである(2002年)。